

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



霊丘自然植物園の日陰斜面では、6m以上に伸びたナラを伐って樹高や直径、重さをはかった。

Contents

- セミナー『中国の環境問題と日中協力』終了 P 2
- 春のワーキングツアー予告 P 2
- 専門家調査団報告 P 3

2008.11

124

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

年末カンパのお願い

いつも GEN の活動を応援していただき、ありがとうございます。

環境林センターをはじめ、霊丘自然植物園、白登苗圃やかけはしの森など、GEN の特長である独自プロジェクトが、人件費、燃料費、資材費などの急激な上昇に悩まされています。除草作業を減らしたり、温室をひとつ閉鎖したり、こつこつと経費削減につとめていますが、到底物価上昇分にはおいつきません。“みみずく基金”で、これらの施設を応援することができます。どうぞご協力をお願いします。そのほかの協力も歓迎いたします。

【ご協力項目】

- 会費：一般会員 12,000 円、団体会員 12,000 円、家族会員（同居家族の 2 人目から）6,000 円、学生会員 3,000 円、ジュニア会員（中学生以下）1,000 円、賛助会員 100,000 円（すべて年額、会報購読料含む）
- 会報『緑の地球』年購読料：2,000 円
- 運営カンパ：GEN 国内経費にあてます。
- 緑化基金：中国山西省大同市の緑化協力費用全般にあてます（以下項目は協力の 2 割以内を事務管理費にあてさせていただきます）。
- “みみずく基金”：1 口 1 万円。緑色地球ネットワーク大同事務所と GEN が運営するプロジェクト（A. 環境林センター、B. 霊丘自然植物園、C. 白登苗圃、D. かけはしの森）の運営費用。（カササギの森募集は休止中です）

【GEN は認定 NPO 法人です】

GEN は国税庁の認定をうけた認定 NPO 法人です。GEN への寄付金は寄付金控除の対象となります。個人の場合は「寄付金額 - 5,000 円」を所得金額から控除することができます。法人の場合は損金に算入することができます。相続・遺贈による寄付は相続税の対象から除かれます。

GEN の場合寄付となるのは、緑化基金、運営カンパ、みみずく基金、会費のうち 2 口以上の部分、賛助会費から 12,000 円をひいた金額です。くわしくはお問い合わせください。

なお、発送作業の都合で、一律に振替用紙を同封いたしますが、最近ご協力をいただいた方には重ねてのお願いではありませんので、ご了承ください。

セミナー

『中国の環境問題と日中協力』 盛会のうちに終了



10 月 25 日、立教大学において、セミナー『中国の環境問題と日中協力』を開催しました。パネリストは加藤千洋さん（朝日新聞）、山本勲さん（産経新聞）

に GEN の高見邦雄事務局長がくわわり、300 人の参加者をまえに、中国の環境、経済、政治まではばひろいものとなりました。内容は次号でご紹介します。

セミナー後の懇親会にも 78 人が参加し、歓談を楽しみました。

今回のセミナーは、GEN の催しとしては大規模なものでしたが、共同主催の立教大学 ESD 研究センターのみなさんと、たくさんのボランティアスタッフのおかげでとどこおりなく終えることができました。

ここにあらためてお礼申し上げます。



テレビ放映のお知らせ

今春から 6 回にわたって現地取材をおこなった BS 朝日の番組、放映日が決まりました。

『よみがえれ緑の大地 中国・大同植林プロジェクト 17 年目の挑戦』（仮）
11 月 29 日（土）19 時～20 時 55 分

ツアーに同行したレポーターの穴戸開さんが植樹や交流をするようすや、遇駕山村の井戸の通水式、さらに雨期整地や菌根菌の活用など技術面にもスポットをあてます。霊丘自然植物園の変遷などもとりあげられる予定。ぜひご覧ください。

2009 春の黄土高原ワーキングツアー予告

来春のツアーの概要が決まりました。費用など変更の可能性があります。日程は確定ですので、参加をお考えの方は予定しておいてください。

春はやはり霊丘自然植物園がメイン。木々の目覚ましい成長ぶりや今年からはじめた調査区の様子など、ぜひご覧ください。ホームステイも復活します。

- 日程：2009 年 3 月 28 日（土）～4 月 4 日（土）7 泊 8 日
- 費用（予定。変更する場合があります）：148,000 円（国際航空運賃、中国国内の交通費／食費／宿泊費を含む。GEN 年会費〈一般 = 12,000 円、学生 = 3,000 円〉、燃油

特別付加運賃、空港使用料、航空保険料、旅券取得費用、個人でかける旅行保険料、個人行動時の費用は含まない）
※中国国際航空利用 ※関西空港発着 ※成田便利用希望の方は、航空運賃の差額 16,000 円が別途必要です。

- 訪問先：中国山西省大同市（北京経由）
- 定員：35 名（定員に達し次第締め切ります）
- 最少催行人数：12 人
- ★参加ご希望の方は、まず GEN 事務所までご連絡ください。申込み書類の準備ができましたら、（株）マイチケットからお送りします。12 月後半以降になる見込みです。

専門家調査団報告

9月4日から12日の日程で、大同に専門家調査団15人を派遣しました。霊丘自然植物園、白登苗圃、カササギの森、環境林センターといったGENの緑化拠点を視察、指導をおこない、七峰山では自然林を観察しました。参加者全員の報告を載せるには残念ながら紙面が足りないので、一部の方々に原稿をお願いしました。

2008年9月の山西省

小川 眞 (GEN 顧問・大阪産業大学客員教授)

11年ぶりの山西省の旅は初めから終わりまで、驚きの連続だった。何度か訪れたことのある北京は、全く様変わりしていてどこがどこか見当もつかない。街路樹は大きくなり、羊が放牧されていた草地はすっかり樹林帯になっていた。万里の長城もきれいになり、八達嶺の周辺もすっかり緑に変わっている。高速道路から見える山の斜面には植えたばかりの針葉樹や広葉樹が育ち、見渡す限りトウモロコシの波が続く。「やればやれるんだ」というのが、実感。中国が一度舵をきったら二度と戻らないだろう。この奔流は誰にも止められないほど凄まじい。環境問題なんかどこ吹く風である。

10年前福建省に通っていた頃、どこへ行っても道路沿いの塀には、かならず立派なスロガンが書かれていた。感心していたら、中国の人に「できないことを書いているんですよ」と笑われた。ちょうど「黒い猫と白い猫」のたとえが法律だと言っていた時代である。今、標語はみんな白く塗りつぶされて、その上に商売の広告がべたべたと書かれている。「13億総商人の国」とはよく言ったものだが、これからは環境植林もこの路線に沿って走らなければならないかと思うと、いささか気が重くなってきた。理想の前にこの現実があると肝に銘じた次第。

かつて土埃と硫黄の匂いが立ち込める大同で遠田先生や高見さんに会って、現地の人たちにマツの苗に菌根をつける方法を説明した。それがうまくいっているという話をうかがっていたが、苗圃へ行って根を掘り上げてみると、菌根がない。これは一度菌をつけておけば大丈夫と言ったので、その後元気にしようと思って、肥しを撒いたせいらしい。窒素、特にアンモニアは根を

徒長させ、菌根形成を阻害するので危険だと言っておくのを、つい忘れていたのである。芽生えの時期に菌をつけるのがコツだから、また来年やってもらおうと、胞子の採り方や撒き方を監督さんにやって見せておいた。

菌をつけたマツを植えた植林地へ行ったら、まぎれもなくチチアワタケやキツネタケ、アセタケの仲間など、菌根菌が出ていたので、大満足。モンゴリマツもアブラマツも元気に育って、ようやく幼児期を終わろうとしていた。しかし、本番はこれから、森林にするには火災や病虫害から守り、何十年も監視し続けなければならない。「到底吾人の預かり知らぬところ」とも言っていられないが、やはり地元の人たちに頑張ってもらうしかない。どうやってバトンタッチすればいいのだろう。経営のセンスが必要らしい。

見込みがないわけではない。これまで17年間協力してきた日本人の熱意が伝わっているらしく、センターや白登苗圃、霊丘県の植物園などには熱心に働く人たちが大勢いて、説明を懸命に聞いてノートを取ってくれた。海外で働いていて、何よりもありがたいのは、



マツ苗の菌根菌をチェックする小川先生(左)

木とともに人が育ってくれることである。

中国大陆は広大で、ときにむなしく思うこともあるが、できるところから始めなければ、「泰山は鳴動」しない。高見さんのように本物の馬鹿(本人の言)になりできれば、大きな山も動き始める。現在議論されている地球温暖化対策(単なるお話)は将来出るものを削減しようというだけで、これまでの温暖化ガスや今のものには間に合わない。化石燃料から出ているのは単に二酸化炭素だけではなく、窒素や硫黄、重金属など有害なものも同時に撒き散らされ、地球を汚染し続けている。温暖化による異常気象がひどくなり、将来が危ぶまれている今だからこそ、世界中であきらめずに木を植える運動を盛んにするべきだと、声を大にして言いたい。皆さんもそう思いませんか。この間の調査旅行はそれを実感する上でもとてもありがたい機会でした。ありがとうございました。

環境親和型の社会実現にむけて

森本 幸裕 (京都大学大学院教授)

センチメンタルジャーニーというか、ぼくの個人的な意味でも、地球環境問題という途方もない課題を考える上でも、今回の旅はなんと印象的だったことだろう。それは思いがけず関西空港の待合わせ場所から始まった。大学農学部のと時の同窓生と卒業以来38年ぶりの再会。大学時代、大平の世なら知り合う機会がなかったであろう、学科を異にする友人と親しくできたのは、

当時の大学が地球の未来を心配した若者で騒然とした活力あふれる状況にあったからだ。自然環境保全の専門に進んだ当方に対して、農業の現場に関わる道を選んだ友人との長年を経た再会は、里地里山保全が、生物多様性や持続可能社会という現代的な課題として、大きくクローズアップされだした現在を象徴しているように思う。

さて、30年ぶりの大同はもっと衝

撃的だった。黄色い大地にまばらに生えた草を食む羊の姿や、天まで利用しつくしたような段々畑。かつてどんな文明が栄えたのか想像もできない荒廃した土地の残る巨大石窟という印象を持っていたのだが。それは石炭の威力だろうか、都会に出稼ぎに出かけた若者のいない田舎ではどんどん緑が回復している。だが、防災や自然環境への

配慮なく、鉄鉱石を掘り出して「公害」も撒きちらしてるのだという。もはや中国は途上国でない、というのが実感だが、このままですすめば地球は持たないのは明らかだ。

途上国がかつての先進国のきた道をそっくりたどると、あまりに地球環境への負荷が大きい。「蛙とび」で一挙に環境親和型の社会を目指せるかどうか

が今後の大きな課題であるといわれているが、今後は「緑化」から、再生する緑の持続可能で高機能で文化的な利用の開発と、一方で失われた原生的な自然の再生が必要と強く思った次第である。貴重な機会を与えていただいた高見さんほか緑の地球ネットワークの皆様がた、ありがとうございました。

日向斜面のトネリコの成長

前中 久行 (GEN 顧問・大阪府立大学大学院教授)

家畜の放牧や薪の伐採がおこなわれなくなった霊丘自然植物園では、植生が回復し始めました。これからの樹木の成長を追跡するために、調査枠を設けて長期継続追跡をおこなっています。樹木としての物質現存量を測定するために、この9月に、10数本の樹木について、幹、枝、葉の乾燥重量を測定しました。詳細は別の機会に譲りますが、これからの植物園の森林発達程度を評価する基準として、また森林の二酸化炭素吸収量などを見積もる基礎的な数値として役立ちます。

日陰斜面の回復は順調です。対して、日向斜面は緑に覆われていますが、低木植物のニンジンボクが主体で、高木になるのは、トネリコの1種(中国名「小葉白蠟樹」、日本のコバノトネリコとは別)にほぼ限られています。重量測定用の幹サンプルで撮影した年輪写真を見て下さい。成長が旺盛な時期に対応する色の濃い部分と、成長の終了期に向かう白い部分を合わせて1年分

です。夏季の一時的乾燥などで、成長が阻害されると偽年輪という輪が形成されることもありますので、輪の数を単純に樹木の年齢とすることは出来ません。写真中の他の部分に比べて極端に幅の狭い白い部分を除外しても23以上の輪があります。根元の幹直径は樹皮無しで2.5cmですから極めて緩慢な成長です。このため、材はたいへん緻密です。印鑑などの材料に使えるかも

しません。トネリコの幹サンプルの比重を計算してみると0.96でした。この数値は、乾燥器で加熱した後の絶乾比重です。材木の比重は通常は含水率15%の気乾比重で表現し、計算上は絶乾比重の1.15倍になります。スギやヒノキでは0.4程度、日本のトネリコ類でバットに使われるアオダモ(コバノトネリコ)は0.5前後です。霊丘のトネリコの比重は重硬な材木として知られているシタンやコクタンと同等です。幹を水に投入して浮くか沈むかの確認を、次回の調査の私の宿題とします。

ちょっとした手抜きが招いたマツの枯れ

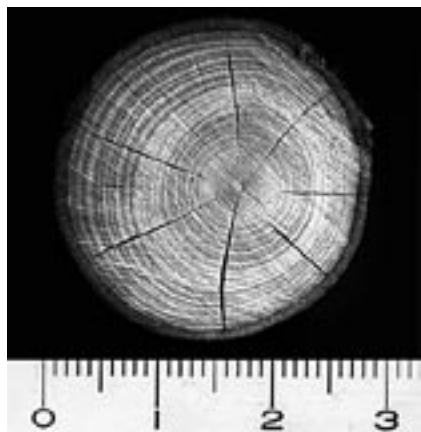
桜井 尚武 (GEN 顧問・日本大学教授)

1998年の地拵え、1999年の植林から始まった采涼山プロジェクトのマツは良く伸びていました。マツの枝はパゴダの屋根のように、階段状に幹から出ています。その階段が8~9段ははっきりと見えます。つまり、8~9年生。最近の階枝の間は40~46cm、樹高も230~290cm、根元直径は7cm以上と、良く伸びていてこれからが楽しみです。

ここの最高地点に近く、並木に植えたシダレニレの大苗が何本も枯れています。そこへゆく道筋、緩い上り坂に向かって左から大きな浸食谷が道路に迫るあたりにも、人の背丈程度に育ったマツの植林地が左右にきれいに続きます。2000年頃の植栽だそうです。このマツ幼齢林の道路近くに、葉が黄ばんだマツがありました。同行した小川先生が気付いて、あれはおかしいぞと言いました。周りのマツは緑濃い成長のいいマツです。

造林が専門の私としては、指摘されたのに見過ごすというわけにゆきません。こういうのは普通、地際か地中に問題があるんだよね、などといって、コウモリガカネズミのたぐいが地際をかじったのではないかと見当をつけて、地際をのぞき込みました。何もありません。少し掘ってみました。やっぱり何もありません。依怙地になってさらに掘りました。15cmくらい掘ったところで、プラスチックテープの一部が見つかりました。指を入れてみると、幹にテープが食い込んでいるようです。そこで、郭さんが車からスコップを出してきて本格的に掘りました。

その結果が写真1です。苗畑から掘り起こした植栽用大苗の根の周りの土(この状態を鉢といいます)が落ちないように根鉢を網で覆い、その上をビニールテープで巻いたのですが、その網とテープをとらずに植えてしまったものでした。幹が肥ったのでテープが幹に



霊丘のトネリコ「小葉白蠟樹」の年輪
(画像処理で濃淡を強調しています)

食い込み、ついには形成層が圧迫され、師管部も締まって光合成でできた養分が下にゆかないので根が成長ができず、まさに枯れかかっているところでした。周囲にポツポツと赤くなっているマツがありました。揺すってみると、簡単に地中部分で折れました。引き抜いて



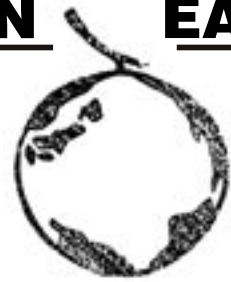
図1

みると、折れた部分が肥大して、幹は圧迫された痕がありました。写真2がそれで、同じ症状です。植え付け注意のための、良い教材になりました。

根の土を落とした裸苗の場合、根は土壌に直接触れるよう植え付けなければなりません。枯れ葉が植え穴に入っ



図2



ていたら取り除くというほど、植え付けの時に注意をすれば、活着率は大幅に増します。たとえ網であっても、取り除いて植えるのは当たり前でした。根元を縛ったスズランテープのようなプラスチックの細いテープでも、1m以上に伸びたマツを絞め殺すことがわかりました。これからも続く植林、みんなの苦労を無駄にしないために、また育ってゆくマツの努力を無駄にしないためにも、ちょっとした気配りですが、大事に根を取り扱いたいものです。

植物園での調査活動

塩見 真矢
(大阪府立大学大学院生)

9月5日、霊丘植物園日陰斜面の調査地で調査をおこないました。6m以上のリョウトウナラを2本切って、生材の重さ、樹高や胸径などを測ります。これらを継続的に調査して、この地域の緑化や自然回復の方針設定や緑化植栽の選定・管理育成に役立てるそうです。今後どのように植生が回復していくのか、大変楽しみです。

翌日、同様の調査を日向斜面でおこないました。6m以上のリョウトウナラを1本とトネリコを15本切りました。日向斜面を見て、日陰斜面とは様子が全く異なることに驚きました。日陰斜面は私より背丈の高いナラ類に覆われており、日向斜面は背丈の低い樹木（ニンジンボクなど）が大半を占め所々に2～3mほどのトネリコが生育しているという状況でした。

この他に、現地の技術者に標本作りを教えました。彼らがすでに自分なりの方法で標本を作成していたことに驚きました。また、森本先生といっしょに標本作りを教え終わった後、少ししか助言をしていない私に、彼らは笑顔でありがとうと握手を求めてきて、すがすがしい気分になりました。

中国での濃い時間

—中国大同調査同行—
松尾 あすみ (日本大学学生)

私にはとても印象に残った苗があります。それは白登苗圃で見たモンゴリマツとアブラマツの毛苗です。丸々としてとても愛嬌があります。守ってあげたいと思うほど小さく可愛らしいです。この小さな苗にいかにか菌を付着させるか、などを専門家の方々が話していました。苗圃の土壌内に松と共生する菌が少ないということにとても驚きました。日本の里山里地では当たり前のように樹のまわりにはキノコが生え、土を掘れば髪の毛のような菌糸がたくさん出てきます。菌が土壌内にいることが当たり前で、菌の重要性に気



付きませんでした。日本でも最近里山里地は人が整備することによって独自の多様な生態系をつくりだしている、野生動物界と人間界との境界の役割を果たしているなどの重要性の再確認がされてきています。そこに照らし合わせて考えると国内の生物の豊かさを実感しました。そしてこの中国での植林の難しさを実感しました。環境条件に合わせたサイズの植林が継続に繋がると教わりました。

GREEN なんでも勉強会

これから楽しみ！ 黄土高原の植物の成長

今春から霊丘自然植物園ではじめて継続植生調査。どんな狙いで、なにを調べるのか。春と夏の調査で、なにがわかったのか。調査の指揮をとる前中久行顧問に、お話をうかがいます。

●日時：2009年1月28日（水）18時30分～20時30分

●場所：大阪市立弁天町市民学習セン

ター（大阪市港区弁天1-2-2-700

オーク2番街7F Tel. 06-6577-1430

JR 環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅より直通路あり）

●講師：前中久行さん（GEN 顧問・大阪府立大学大学院教授）

●参加費：700円

●問合せ・申込み：GEN 事務所まで

植物屋のこぼれ話 (続編) その 22

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

●乾燥地の植物

日本は雨の多い国だから、乾燥地の生活体験がない人が多いので、水の植生への影響について深く考える人が少ないように思う。世界の乾燥地域については過去に本誌でふれたことが何回もあったが、今回は乾燥した大陸、オーストラリアの植生について記そう。

筆者の訪ねたのは東南部だけであるが、そこはオーストラリアの唯一の森林地帯である。飛行機でオーストラリア大陸を上空から見ると日本のような緑の大地と違い、赤茶けた土地が延々と続く。やがて東南部の森林地帯にさしかかるが、緑色がない。高度が下がると銀色の大地になってきた。着陸寸前にそれがユーカリの林であることがわかった。日本に植えられたユーカリは銀色に光ってはいるが一応緑色をしている。ここオーストラリアでは完全に銀色である。着陸して自動車で走ると実に多くの種類のユーカリがあることに気づく。しかし、大部分の種は銀色である。ごく稀に日本に植えられた種の緑色程度のものもある。

●ユーカリの林

ユーカリの木はオーストラリアの特産品であるが、これは一応常緑樹である。一応とことわったのは常緑という字にこだわっただけで、落

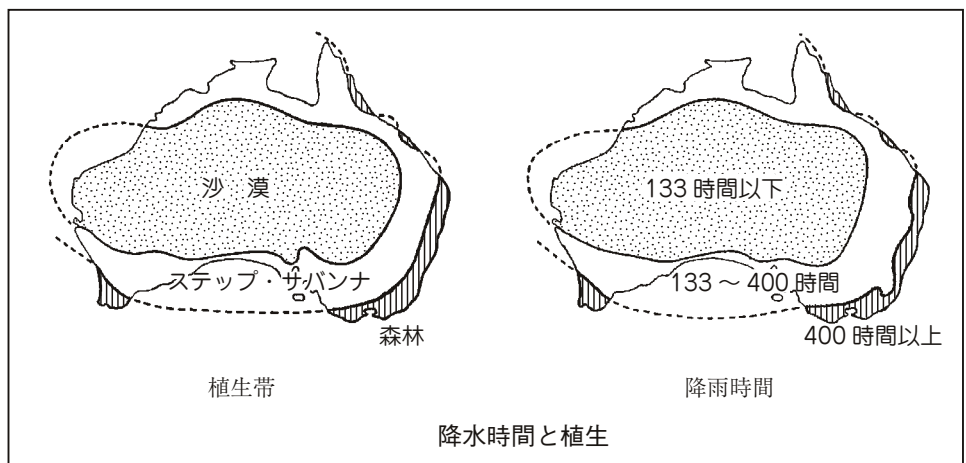
葉樹ではない。乾燥に強く、本来なら暖帯落葉樹林帯に発達しているはずの種類である。一属 300 種という大きな属だが、熱帯から温帯まで分布し、山の尾根筋や谷底などに適応した種が棲みついている。古く日本に導入されて、大木に育っているのはグロブルス (*E. globulus*) で、これはオーストラリアの南にある雨量の多い、寒い地のタスマニア産であり、これは現地でも緑色であった。また、北部亜熱帯地域の河辺林にある *E. camaldulensis* 種も比較的よい緑色をしている。この種はタイ国の緑化に用いられて好成績を挙げていた。

●降水時間とその分布

オーストラリアは乾燥した大地であるが、雨の降る時間で植生帯がはっきりと分けられる (図)。同じような気候

帯の世界各地に植林され、北米カリフォルニアやマダガスカル、南米ウルグアイには大木が生い茂っていて、ここが原産地ではないか?と思うほどよく成長している。日本には多くの種が導入されたが、雨が多いのと台風によって全滅し、植林で成功した場所は皆無である。筆者のいた植物園にも 30 種あまり導入し、オーストラリア区を設けて植栽したが残っているのは前期のグロブルス種だけである。

意外なことに私が見たオーストラリア東南部の野生の木は、胸高直径 50cm 程度の大木に過ぎなかったが、マダガスカルでは直径 1m を越えるものがたくさんあった。これは国に例えればイギリスとアメリカとの関係みたいに思えてならない。中国原産のイチヨウやクスノキが、中国よりも日本の方が元気に大きく育っているのと同じことかもしれない。



ゆの人の人

諏訪 直久さん (京都府)

私が大同に行ったのは 99 年の春、霊丘自然植物園や采涼山の初期のころでした。当時中国に留学していた私は、ツアーの後にも写真家の橋本紘二さんの荷物持ちをして村々を訪ねたり、サントリー労組さんやイオン労組さんのツアーに一部同行させていただきました。



あっという間に 10 年近く過ぎ、忘れたことも多いです。しかし、子どもたちの笑顔、老人の手、水の貴重さと偏在の問題、人々の信仰心など、深く刻まれた記憶の断片は、一生残ると思いま

す。私が無沙汰ばかりしている間にプロジェクトを発展させてこられた皆さんへ、尊敬と感謝の気持ちで一杯です。

さて、現在は、京都の実家に住んでいます。32 歳、独身です。(株)堀場製作所で生産管理の仕事をしています。同じ会社には会員の李虎さんがいます。オフは、先日 A COMMON BEAT という素人で作るミュージカルの舞台に立ちました。話は、異文化の国に住む者同士が交流を始め、互いに理解できず戦いになるものの、最後は人間として心にもつ共通のものを互いに感じて、

黄土高原史話〈42〉

馬上、天下を争うべし

不人気ゼミゆえの対策で、数年間「三国志」をテーマにしたことが（「黄土高原の環境と歴史」などでは志望者僅少）。案の定、オタクの男子学生ばかりで、横山劇画とゲームソフトで育った口。決まって出るのが、「誰が一番強かったか」。

個人的な勇力という点では、曹操のボディガードの典韋と許褚。劉備と「桃園結義」した関羽・張飛もメッチャ強いが、最強の武将は何といっても呂布（?～198）だろう。

出身は并州五原郡九原県というから、今の内モンゴル自治区第二の都市包頭のすぐ西隣り。陰山山脈と黄河にはさまれた地で、一帯は清朝以後漢人が入植して畑地化した。このころは牧馬いなく緑の草原。呂布には匈奴の血が混じっていたかもしれません。それかあらぬか弓・馬にすぐれ、人称して「飛将」となす。名馬赤兔にうちまたがり、颯爽と戦場を駆けるさま、時人語って「人中に呂布あり、馬中に赤兔あり」（注引く『曹瞞伝』）と。しかし、「驍猛なりと雖も、謀なくして猜忌多く、その党を制御する能わず」というわけで、結局曹操に投降する。それでも、「殿が歩軍の指揮をとり、拙者に騎兵を率いさせたなら、天下平定もわけなきこと」と言ったのは、いかにも「飛将」呂布らしい。

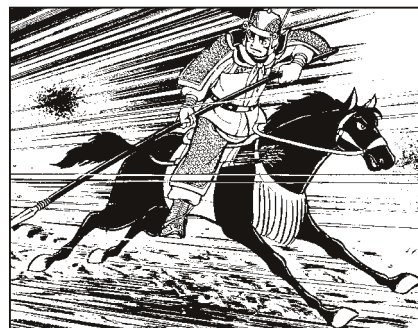
谷口 義介（摂南大学教授）

以上すべて正史『三国志』（晋・陳寿著）に依拠したが、呂布の死後、赤兔は曹操から関羽に贈られたとするのは、小説『三国演义』（明・羅貫中作）によるフィクション。

赤兔よりは格下ながら、劉備が乗った盧も有名。ただしこれは陳寿の本文には見当たらず、『三国志』の注が引く『世語』に出てくる。劉備追われて危機一髪、三丈も躍りあがって檀溪を跳び越えた、というのだが。

馬がらみて面白いのは、「単馬会語」。「交馬語」ともいうが、対陣中、双方の大將が単独で出ていって、騎馬のままサシで会談すること。軍馬の産地、涼州隴西郡出身の老雄韓遂が二度している。一度目は、董卓なきあと後漢朝廷のナンバーズリー樊稠と。二度目の相手は、曹操。「ここに於て交馬語して時を移すも、軍事には及ばず、ただ京都（洛陽）の旧故を説き、手を拊って歎笑するのみ」。ときに曹操 57 歳、韓遂は 70 に近い。両軍対峙する緊迫の場面だ。それぞれの大將がむかし都にいたころの思い出話に興ずるなど、なんともいい情景ではないか。

最後に、馬に関連した故事成語を一つ。「髀肉の嘆」がそれだが、『三国志』の本文ではなく、注の『九州春秋』に出る。荊州の劉表のもとで長らく無聊をかこっていた劉備、厠から出てきて



ハラハラ涙を流す。劉表がいぶかって聞くと、

「常に馬上にあったので髀の肉は落ちていたが、近頃は戦場に出ることがないから肉がついてきた」

と言って、功名を立てる機会の得られぬことを嘆いた、と。ではなぜ馬に乗っていると髀の肉は落ちるのか。たぶんそれは、当時の乗馬具に鐙（馬に乗ったときの足掛け）がなかったことと関係しよう。

漢民族は匈奴から騎馬の術を学んだわけだが、匈奴にはもともと鐙などなく、そこで乗馬が不得手の漢民族が鐙を発明。ただしそれは4世紀代のことで、三国志の時代にはまだ無い。両足を支える鐙がない状態で馬を乗りこなすためには、両髀の力でしっかり馬の背をはさんでおく必要あり。そこで必然的に贅肉が取れ、筋肉質の髀になったのでは？

（図は横山光輝『三国志』⑧ 147 ページを利用して頂いたが、呂布の右足に注意。鐙はまだ無いはずだから、時代考証的にはおかしい）。

共に歩み出すというもので、GENのツアーでの心情と重なる部分があります。思いっきり歌って踊って、いい汗かきました。公演の主催もNPO団体で、毎年、出演者を一般募集しています。今回集まった仲間には国際協力や環境に関心がある人も多く、人の輪は繋がるものだと思えました。皆さんもいかがですか？

* NPO 法人コモンビート > <http://www.commonbeat.org/>

GEN 自然と親しむ会 淀川で冬の鳥観察会

淀川の水辺に集う鳥たちを観察してみましよう。水鳥ばかりではなく、さまざまな鳥が見られます。鳥だけでなく、自然全般に造詣の深い高田直俊さんにご案内をお願いしました。

●日時：2009年2月15日（日）10時～15時ごろ

●場所：枚方市から樟葉までの淀川沿い（樟葉で解散）

●集合：京阪電車「枚方市」駅中央改

札口付近に10時

●案内：高田直俊さん（大阪自然環境保全協会会長）

●参加費：700円（保険料ふくむ）

●持ちもの：暖かい服装、歩きやすい靴。弁当、飲み物、敷物。あれば双眼鏡、野鳥図鑑。

●申込み：2月9日までにGEN事務所まで

※雨天中止



日本緑化工学会乾燥地緑化研究部会
第 15 回シンポジウム
「中国乾燥地における緑化技術と
その将来」 V

- 日時：12 月 14 日（日）13 時～17 時
- 場所：京都大学 百周年時計台記念館国際交流ホールⅢ（京都市左京区吉田本町）http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r_y.htm
- 参加費：500 円
- 事前参加申込みは不要

【プログラム】

『植林ボランティアの「緑化思想」とその解体ー中国内モンゴル牧畜民の視点からー』

児玉香菜子さん：（人間文化研究機構地域研究推進センター／総合地球環境学研究所）

『斜前から見た緑化ボランティアー緑の地球ネットワークの活動ー』

前中久行さん（大阪府立大学大学院生

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月 15 日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

命環境科学研究科)
『中国現地住民から見た植林ボランティア』
呉向栄さん（世界の砂漠を緑で包む会現地事業担当）
詳細は下記のサイトをご参照ください。
http://www.soc.nii.ac.jp/jsrt/research/research_desert.html#c

甲浦ポンカンのご案内

ポンカンの季節がやってきました。
年末年始の贈り物にいかがですか。

●ポンカン（低農薬・有機栽培）

A	3L/2L	5kg	化粧箱	4,000 円
B	〃	〃	普通箱	3,700 円
C	〃	3kg	化粧箱	2,600 円
D	L	5kg	化粧箱	3,500 円
E	〃	〃	普通箱	3,200 円

●ゆず酢

・4 合ビン 2 本詰め 3,800 円
※送料別途（20kg まで関西 630 円、関

東 840 円）

※出荷：2009 年 2 月まで

★申込み：〒781-7411 高知県安芸郡東洋町甲浦田中農園 田中隆一さん
（Tel/Fax 0887-29-2500 E-mail: tanakan@tk2.nmt.ne.jp）

★売上の一部をご寄付いただいているので、ご注文の際、「GEN の紹介」と一言そえてください。

編集後記

日本人のノーベル賞受賞で盛り上がりましたが、イグ・ノーベル賞って面白いですね。迷路の最短経路を学習する粘菌とか牛糞から抽出されるバニラの香り成分とか、インパクト強烈です。ところで、今年のイグ・ノーベル平和賞は、「植物にも人間と同様に尊厳がある」ことを法的に定めたスイス連邦倫理委員会とスイス国民に授与されたそうです。法的につて……。でも、ノーベル平和賞より値打ちかも。（東川）